

LOVE GIFT

不純愛誓約を謀^はられまして

目 次

LOVE GIFT	
不純愛誓約を謀 ^{ほか} られまして	5
番外編 After days	289

LOVE GIFT

不純愛誓約を謀^はられまして

春の陽射しが心地よく、そよ風も柔らかい季節になってきた。

今年は春の訪れが遅かったのもあり、区立図書館の庭に植えられた桜はまだ八分咲きほど。それでもピンク色に染まる大樹は、とても綺麗だ。

ひらひらと舞う花びらは幻想的で、見ているだけで心が晴れやかになる。

閑静な住宅街にある区立図書館で司書として働く藤波香純は、蔵書要望書をまとめた資料を取りに行く足を止め、しばらく外を眺めていた。

庭ではしゃぐ小学生がいる。真新しい紺色の制服や帽子から察するに、今年入学した新一年生だろう。

子どもたちが飛び跳ねる姿は、とても愛らしい。

香純がふつと頬を緩めた時、ポケットの中で携帯が振動した。

「えっ？ 葵……!？」

香純は慌てて職員用の休憩室に入った。

館内は広いので、司書の呼び出しはほぼ携帯で行われる。そのため携帯に着信があっても別段隠

す必要もないが、今回は相手が相手だった。香純はあたふたと通話ボタンを押す。

「葵、どうしたの!？」

『ごめんね、仕事しながらに電話して。実は今夜なんだけど、その……あたしに代わってホテルへ行ってくれない?』

「葵の代役をわたしが?」

彼女は大河内葵——香純の大学時代の親友であり、窮地を助けてくれた大恩人でもある。

実は香純は、現在多額の借金を負っている。

それは、以前付き合っていた恋人によって負わされたものだ。元カレは料理人で、独立して自分の店を持つとうと頑張っていた。そんな彼を応援したい一心で、香純はその独立資金の連帯保証人になったが、彼はその後、突然香純の前から姿を消した。

香純のもとに残ったのは、借金だけ。その返済にはどう軽く見積もっても、十年以上かかる。愕然となった香純に、救いの手を差し伸べてくれたのが葵だった。彼女が、代役派遣サービソ会社でのアルバイトを紹介してくれたのだ。

「請け負う役は様々だが、結婚式に新婦の友人として出席するなど、依頼人の望みどおりの人物に扮する仕事だ。」

香純とて、早々に借金を完済するには、クラブなどで働いた方がいいとわかつてはいる。

でも、現在の仕事を失う危険を冒してまで、夜の世界に飛び込む勇気はなかった。自己破産も考えていなかった。葵の提案は本当に有り難かった。

そうして香純は、葵の紹介でその会社の世話になることを決めたが、仕事をするにあたって、一つだけ条件をつけさせてもらった。

それは、第三者を傷つける代役だけは絶対にしない、というものだ。

香純自身、将来の約束を交わしていた元カレに裏切られて酷く傷ついたその経験から、自分が人を傷つける仕事はやりたくなかった。

葵は、そんな香純の気持ちを知っている。だから、香純の意にそわない仕事を頼んでくることはないのだが……今回はどうも彼女の歯切れが悪い。

香純は訝しく思いながら、携帯の向こう側にいる葵に神経を集中させた。

「葵。代役の返事をする前に、まず訊いていい？ 今夜の仕事の内容はどういうもの？ もし、わたしの嫌いな――」

『言いたいことはわかっている。だけど、今回だけはお願い。他の人たちは皆仕事が入っていて、頼めるのは香純しかないの！』

葵ははつきりとは言わないが、言葉の端々から、香純が嫌う仕事なのだと思いがついた。

香純は小さく息を吐き、休憩室のソファに腰を下ろす。

「わたししか頼める人がいない、っていうのはわかった。でもどうして？ これまでの葵なら、そういう仕事をわたしに回すなんてしなかったのに」

『実は、彼氏のお母さんが田舎からこっちに出てくるの。それで今夜……彼があたしをお母さんに会わせたいって言ってきて……』

言い淀む葵の口調から、香純に頼むのを申し訳なく思っているのが伝わってくる。

正直、断りたい。でも理由を聞いた今、それはもうできなかった。

だって、友達には幸せになってほしいから……

「……わかった。わたしが代わってあげる」

『本当!? ああ、ありがとう！ 絶対にダメって言われると思ってたの。香純の事情を知ってるし。だからあたし、お願いしながらも彼氏にどうやって謝ろうか、そればかり考えて』

「いいのよ。でも、今回限りだからね」

『うん、うん。本当にごめんね。この借りは絶対に返すから。……じゃ、今夜の仕事に必要な情報は、あとでまとめてメールするね。会社の方は心配しないで。あたしから連絡を入れておく』

「了解。今夜は楽しんできてね。じゃ」

そう言って携帯を切った香純はしばらくソファに座っていたが、やがて意を決して立ち上がった。「決めたのはわたしよ。笑顔で前を向いたら、きつと乗り越えられる」

自分の言葉に力強く頷くと、香純は休憩室を出た。

蔵書要望書の資料を持って、一般カウンターへ戻る。そして、先輩司書の織田に資料を渡した。

それから、次々に溜まっていく返却本を棚に返す作業に入る。午後も同じ仕事をし、同時に棚の整理も行った。

閉館間際になった頃、葵から今夜の仕事についてのメールが届いた。周囲に誰もいないのを確認して、香純はこっそり目を通す。そこには依頼主の基本情報や、代役に伴う設定が書かれてあった。

依頼者は男性で、三十代のスポーツマンタイプ。会社帰りのためスーツ姿だがネクタイを外し、テールには携帯と腕時計、さらに白いハンカチを置いておくところある。

そんな依頼人が求めるのは、清楚せいそでありながら好きな相手には情熱的に振る舞う女性らしい。そう求める理由が、追記として書かれてあった。

今夜、女性を連れていくが、その彼女は恋人ではなく会社の後輩らしい。彼女とは付き合っていないのに、後輩は、周囲に自分たちが恋人同士だと思わせる振る舞いをするという。しかも、いくらやめてほしいと言っても聞き入れない。そんな積極的な後輩を納得させるには、熱烈に愛し合う恋人がいるのだと信じ込ませる必要があると考えたようだ。

「それで、情熱的な女性を……。相手の人は傷つくかもしれないけど、愛し合っているカップルの間を壊すんじゃないのね。良かった」

香純はホッと胸を撫で下ろしたものの、そのあとに続く文に目をばちくりさせた。

そこには、ホテルのラウンジで依頼人を見つけるなり、愛しい人に会えて嬉しいとばかりに頬にキスしてほしい、とある。

「なっ、そんなことまで求めているの!？」

思わず大きな声で言ってしまった、慌てて手で口を押さえる。

誰かに聞かれたかとひやひやしたが、こちらへ近づいてくる足音はない。

香純は力なくうな垂れて頭を振った。

「葵……、なんて依頼をまわしてくれたのよ」

しかし、引き受けた以上はきちんと務めなければならない。

見知らぬ人に口づけをするなんて嫌だが、場所は頬。外国人と挨拶あいさつを交かわすのだと思えば、なんとかできるはず。

そう自分に言い聞かせるが、香純の頭の中では、キスという単語がずっとぐるぐる回っていた。

香純は閉館作業を終えた同僚たちと一緒に図書館を出た。

昼間はぽかぽか陽気で気持ちよかったが、太陽が沈むと気温が下がる。思わず身震いしながら、春用のコートの前をしっかりと掻き合わせた。

「今夜は特に冷えるわね」

「本当そうですね」

腕うでを擦する織田に、香純も同調する。

ここ数日は暖かかったのに、今夜は肌を刺すような冷たい風が吹いている。予期せぬ何かを告げられている気がして、妙に心がざわついた。

香純は思わず織田と同じように腕うでを擦すり、風で揺れる桜の木々を見回してから、彼女に視線を戻す。

「これは、早く帰るに限りますね」

「本当にそうだわ。じゃ、帰りましょう。お疲れさまー」

「お疲れさまでした」

他の司書と別れると、最寄り駅に小走りで行かう。

「急いで行かないと」

約束の時間までは、あと一時間ぐらいしかない。

演じる場所は、汐留にあるシテイホテルのバー＆ラウンジだ。移動だけなら問題ないが、その場に相応しい服装に着替える必要がある。そうなると、残された時間は僅かしかない。

香純は大急ぎで電車で飛び乗った。

目的地のホテルの最寄り駅に到着すると、香純はファッションビルに入った。そこで、ボウタイがアクセントになるシフォンのブラウスとパール風のアクセサリ、そして小さなバッグを買う。

目的の品を手に入れた香純はパウダールームに移動し、購入した服に素早く着替える。そしてデート用のメイクをし、サイドの髪を三つ編みにして、ハーファップにまとめた。

「うん、意外といいかも」

耳元で揺れるパール風のフックピアスもいい感じだ。きつと清楚な女性に見えるだろう。

準備を終えた香純は、着替えの入った袋と購入した小さなバッグを持って、パウダールームを出る。しかし、手にした荷物を見て途方にくれた。

いつもなら駅のコインロッカーを利用するが、今夜は引き返す時間がない。かといってファッションビルのロッカーだと、営業時間内に取りに戻れるかどうかわからない。

「ああ、どうしよう……。あっ！」

視線を彷徨わせていた時、コンビニエンスストアが目に入った。考える間もなく店内に飛び込み、

宅配の手続きを取る。

無事に終えホッとして外に出ると、シテイホテルに真っすぐ向かった。

シテイホテルは、東京湾のウォーターフロントに位置する複合ビルの上階にある。初めて足を踏み入れたそのビルのエントランスには、和風モダンな空間が広がっていた。

素人目にもわかる、漆器や高級絹織物で整えられた豪華な内装。それを目にしただけで、香純の足ががくがくしてきた。

借金を背負ったこの二年間、不本意ながらも香純は、代役のバイトでいろいろな場所に行く機会があった。自分ではない人になりきり、普通に図書館司書として働いているだけでは得られなかった経験を積んだといえる。

でも今夜のホテルは、今まで行っただこよりも格式が高い。これまでの知識など全然役に立たないかもしれない。

場の雰囲気にもまねながら、腕時計に視線を落とした。

「嘘……。約束の時間を五分も過ぎてる！」

自分の失態に苛立ちを覚えながら、急いでホテルへ繋がるエレベーターに乗り込んだ。

静かに上昇するエレベーターの中で、香純はこれからの仕事に集中すべく、何度も深呼吸をする。エレベーターのスピードが緩むのを感じて目線を上げると、数秒後に扉が開いた。

さあ、仕事に集中するのよ！

香純は司書の自分から依頼人の恋人へと気持ちを切り換え、一歩踏み出した。

フロントデスクを通り過ぎ、正面にあるバー&ラウンジに入る。

天井が高いそこは、きらびやかでありながら落ち着いた雰囲気もあり、とても素敵だった。

薄暗い店内に、オレンジ色のランプが彩りを添えている。大きな窓の向こうに広がる宝石のような夜景は壮観だ。

静かな空間にはピアノの生演奏が流れていて、ムードもとてもいい。

依頼人は、自分の恋人にはこのような場所で愛を囁くと、後輩女性に示したいのだろう。

「いらつしやいませ。お一人さまでしょうか？」

ホールスタッフに話しかけられて、香純は頭を振った。

「いいえ、待ち合わせをしていて……。田崎で予約しているはずですが、もう来ていますか？」

メールにあった情報を口にする、女性スタッフが頷いた。

「はい。ご案内いたします」

「あ、あの！ どこに座っているかだけ教えていただけますか？ 実はわたし、彼を驚かせたくて」

振り返ったスタッフに伝えると、彼女が口元をほころばせた。

「かしこまりました。では、お席の近くまでご案内いたします」

香純は笑顔で応じ、スタッフと一緒に歩き出した。

連れられて向かう奥の席は、各テーブルの間隔が広く、ソファも大きかった。ある程度のプライバシーを保てる空間が作られている。

「あちらでございます」

女性スタッフがさりげない仕草で奥を指す。視線の先を追うと、そのテーブルには男性と女性が向かい合って座っていた。

香純がいる場所からは、男性の後ろ姿しか見えない。そのため顔はわからないが、正面に座る女性の顔は、ライトに照らされてはつきりと見て取れた。とても綺麗な人だ。

香純より少し若く思えるその女性は、目の前にいる男性が好きで堪らないのか、想いが顔に出ている。

二人の座るテーブルに目をやると、男性の手元に置かれた携帯と男物の腕時計、そして白いハンカチがあった。

全て癸から受けた情報どおり。その男性こそ、依頼人の田崎に間違いない。

「ありがとうございます」

スタッフに礼を述べると、彼女は「後ほどご注文を伺いに参ります」と言って去っていった。

香純は意識して表情を和らげて、依頼人が座る席へと進む。

心臓が破裂するのではと思うほど速い鼓動が示すのは、緊張と憂惧。

これまで香純が請け負ってきた仕事とは異なる内容なのだから、不安にならない方がおかしい。それでも香純は必死で演技を続け、田崎の脇で立ち止まった。

「……どなた？」

依頼人の正面に座る女性が香純に気付き、きよんとした顔をする。

ごめんなさい——心の中で彼女に謝りながらテーブルに置いてある目印をもう一度確認して、香純は田崎の肩に手を置いた。

「待たせてしまつてごめんなさい。こんなに遅くなる予定ではなかつただけ……」
と、ここでキスよね？

香純は田崎の頬に顔を寄せる。艶やかな笑みを浮かべて、軽く触れるぐらいの口づけをしようとしたその時、不意に男性が香純の方へ顔を向けた。

「えっ!？」

息を呑んだ時はもう遅く、香純は男性の唇にキスをしていた。

あまりの衝撃に頭の中が真っ白になり、軀が強張る。

唇に、キス……!？」

香純が息を呑んだ数秒後に、陶器同士がぶつかるような音が響いた。

我に返り、ぎしぎしと音が鳴りそうな軀に力を入れて、ゆっくり顔を離す。

テーブルに置いてあるランプの灯りに照らされた男性の端整な顔を、香純はこの時になって初めて見た。

なんて素敵な人！

こちらを注視する男性と目が合い、香純の心臓が一際高く跳ね上がった。

襟足を程よいバランスで刈り上げた爽やかなマッシュシヨート、涼やかで穏和な目元、相手の心をいとも簡単に虜にできそうな綺麗な双眸。そして真っすぐな鼻梁に、形のいい唇。

魅力あふれる大人の色気から、香純は目を逸らせなくなる。

だが、依頼人の眉間にほんの僅かに皺が寄つたのを見て、香純は素の自分を曝け出していたことに気付いた。

仕事中に何をしているの！ 集中して！——そう自分に言い聞かせて、依頼人にニコツと笑いかける。心なし頬が引き攣るが、気にせずに軀をそっと離れた。

「仕事が長引いてしまつて。でも、こんな風に優しいキスで迎えてくれるなら、それも良かったかな……ちよつと恥ずかしかったけれど」

香純は決まりの悪い顔をして、田崎の正面に座る可愛らしい女性に目を移す。彼女の瞳には傷ついた色が浮かび、愛らしい唇は震えていた。

動揺した女性の手がコーヒーカーップにぶつかったのか、カップはソーサーの上で斜めになり、中身がテーブルに飛び散っていた。

申し訳なく思うものの、ここで彼女に同情しては仕事にならない。香純は自分を押し殺して、目の前の女性に笑顔を向けた。

「驚かせてしまったみたいね、ごめんなさい。人前だどこまでオープンにしないのに、今夜はわたしが遅れたせいで、気が気でなかつたのかな」

香純は同意を得るつもりで田崎に流し目を使うが、彼は無表情で香純を凝視していた。何かを考えているのか、一言も話そうとしない。相槌すら打たなかった。

ひよつとして、出方を間違つた？ こういう風にしてほしいわけではない!？」

内心慌てつつも表情を取り繕って女性に意識を戻すと、彼女は大きな目を潤ませて、田崎に縋るような視線を向けていた。

「好きな人が……いたの？　では、あたしは？　ここに来てくれたのはあたしを——」

その時、田崎がやにわに香純の腰に手を回し、彼の方へと引き寄せた。さらに、その手を香純の腹部へと滑らせる。

えっ？　……えっ？！

「詩織さんの目に入る光景が、真実だよ」

「嘘よ、そんなの嘘だわ！　話が違うもの。だって、お祖父さまはあたしに……」

香純を蚊帳の外に、二人だけの会話が進む。

でも香純の思考は、これ見よがしに香純を抱く田崎の手、熱い軀、白檀のような甘くていい香りばかり向いてしまう。

平静を装えなくなつて視線を彷徨わせると、数メートルほど離れた席からこちらを注視する男性と視線がぶつかった。

男性は香純と田崎を交互に見やり、香純たちの前のテーブルに視線を落とす。

その仕草があまりにも不自然で、香純は男性につられるように、自分の前のテーブルへと意識を向けた。

何かが頭の片隅に引っかかり、香純は改めて田崎に目をやる。

高級そうな生地で作られたスーツに、皺のないシャツ、ネクタイ。そして、オニキスと一粒

のダイヤモンドがあしらわれたネクタイピンを目で追つて、もう一度離れた席の男性に視線を合わせる。

彼は香純を見つめながら自分の首に触れ、二つほど外したシャツのボタンに指を走らせた。

香純はハツとして、田崎に目をやった。彼がネクタイを締めているのを確認して、愕然となる。

ま、間違えた……。依頼人はネクタイを締めていないはずなのに！

慌てて男性に目を戻すと、彼はいそいそとテーブルに置いた携帯、ハンカチ、そしてネクタイを回収していた。続いて腕時計を手首にはめ、焦った様子で目の前の女性に何かを話す。その後こそり香純に目配せし、小さく会釈すると、彼は女性を急ぎ立ててこの場を去っていった。

あの男性こそ、本当の依頼人の田崎だったのだ。

ああ、どうしよう……！

真実に気付いた香純は、魂を奪われたみたいに身じろぎすらできなくなる。

「卑怯者！」

女性の悲痛な叫びに香純が我に返った瞬間、彼女が手を大きく振り上げるのが見えた。

叩かれる！

咄嗟に、香純は手で顔を覆った。

しかし、いつまで経つても痛みはやってこない。

おずおずと目を開けると、田崎が……いや、依頼人ではないその男性が、立ち上がって女性の手を掴んでいた。

「詩織さんらしくない振る舞いだ。先ほども言ったように、君が目にしたものが真実。言っている意味、わかるね？ きつと、蒲生氏も理解してくれる」

「あたし、諦めません！ だって、貴方のお嫁さんになる日をずっと夢見てきたんですもの！」
女性は、大きな目から涙をぼろぼろと流しながら、先ほど出ていった依頼人と同じ方向に駆けていった。

この騒ぎに、他の客たちが何事かと遠目に窺っているのが気配でわかる。でも香純は、そちらには一切目を向けなかった。

見るべき相手は、目の前にいる男性ただ一人だからだ。

混乱のあまり、男性と詩織と呼ばれた女性が何を話していたのか正確に聞きとれてはいなかったが、話の節々から、二人が結婚話を進めるほどの仲だということは理解できた。

なのに、香純がそれを壊してしまったのだ。

自分のしてかした失態を自覚するにつれ、血の気がスーッと引き、谷底へ落ちていくような感覚に襲われる。

逃げたい、でも逃げてはいけない！ きちんと謝らなければ！

だがその前に、男性に逃げた恋人を追わせるのが先決だ。

「は、はや……早く恋人を追って！」

震えて上手く言葉にならなかったが、なんとか伝えようと、香純は必死に背の高い彼を見上げた。ところが男性は、走り去った女性とは真逆の方向を凝視している。

そちらに目をやると、初老の男性二人がそちらを見ていた。そのうちの一人が腰を浮かしかけた時、香純の腰に触れる男性の力が強くなった。

驚く香純に、男性がゆっくり視線を落とす。そこには、香純を非難する強い光が宿っていた。

香純の軀に戦慄が走るが、それでもきちんとしなければと声を絞り出す。

「すみませんでした。わたし、こんなつもりでは——」

「黙って。このまま何も言わず、俺に付いてきてくれないかな」

「……えっ？」

「君は自分が取った行動について、俺に説明する義務がある。そうだろう？」

男性の言うとおりだ。香純が素直に何度も頷くと、彼はテーブルに置いてあった携帯などを無造作にポケットに入れ、香純を連れて出入り口に向かった。

「部屋につけてくれないかな」

精算カウンターで一度立ち止まった男性は、スタップにカードキーを渡した。

部屋に？ もしかして、あの女性と泊まる予定だった!? —— そう思った瞬間、申し訳なさでいっばいになる。

どうしたらこの罪を償えるのだろうか。

男性にエレベーターホールへ促されても、上階へ連れられて部屋へ入るように誘われても、香純は逆らわずに従った。

「いっちだ」

ようやく男性が香純から手を離し、部屋の奥へと進んだ。男性に続くとうと面を上げたところで、目の前の部屋の広さに驚く。軽く二十畳を超えるその部屋は、中央をテレビ棚で間仕切りしたベイビュー・スイートルームだった。

一方はキングサイズのベッドが置かれたベッドルーム、もう一方は三人掛けソファと二人掛けソファが設置されたりビングルームになっている。

男性は恋人と過ごすために、こんな素敵な部屋を用意していたのだ。

ああ、悔やんでも悔やみ切れない！

香純が部屋の隅で悄然と俯く中、男性がスーツの上着をソファに投げ、冷蔵庫を開けてビール瓶を取り出した。細長いグラスを二脚持つてソファに座り、それぞれのグラスにビールを注ぐ。

「そんなところに突っ立っていいいで、こっちに來てくれ」

香純は意を決して、男性が指した一人掛け用のソファに進み出る。そして小声で「失礼します」と告げて、静かに座った。

香純の前に一脚のグラスを置いた男性は、優雅な所作でソファに凭れ、グラスの中で上昇しては消える気泡を見つめる。

その間が息苦しくて、口腔の乾きを防ごうと香純は何度も生唾を呑み込む。すると、男性が不意に、香純に視線を投げた。

「それで？」

「も、申し訳ありません！ 全部……わたしの責任です！」

香純は膝に手を置き、深く頭を下げた。

「うん……。君の責任だね。そうなった経緯を話してくれないかな」

香純は震える手でバッグを開け、代役派遣サービス会社の名刺を取り出し、男性に手渡した。

「代役派遣？」

「はい。依頼人が望む代役を請け負う会社です。家事、運転の代行などしていますが、食事を一緒に楽しむ相手を望まれることもあります。他にも結婚式での新郎新婦の友人を演じたり、時には……恋人を演じたりすることも」

「恋人？」

そこに反応した男性が、片眉を上げて問いかける。

「はい。今夜は恋人を演じてほしいと依頼を受けて来ました。依頼人に好意を寄せる女性に、その恋は実らないと納得してもらうためです。わたしは依頼人から聞いていた目印を探し、その対象者に近づきました」

「目印……、もしかや携帯と腕時計とハンカチか？」

その観察眼と頭の回転の速さに驚き、香純は伏せていた目を上げた。

香純を射貫く男性の眼差しには、有無を言わせないものが宿っている。

その圧に香純は口籠もるが、態度から察したのか、男性が疲れたように息を吐き出した。

「なんとという偶然だ。飲み物を運ぶホールスタッフとぶつからなければ、俺は濡れた腕時計を外さ

なかったし、ハンカチで手を拭くこともなかった。そして、あのしつこい電話を無視するために、携帯の電源を切ることも……。重なった不運が、この出会いに繋がったわけか」

自分に言い聞かせるように呟く男性に、香純はもう一度「申し訳ありませんでした」と謝った。「実は、もう一つ目印があったんです。それはネクタイの有無です。そこまでちゃんと確認すべきでした。でもわたしは貴方の背後にいたので、目に入った物だけで決めつけてしまい……。貴方と恋人の間を裂くような真似を」

謝って許されるとは到底思えないが、それでも香純は深く頭を下げる。

「わたしから彼女に説明させてください。貴方は裏切っていないと、できる限り——」

「岩倉みつぎ、か」

香純の言葉を遮り、男性が手元の名刺を見て呟く。

「いいえ、違います」

香純は上体を起こした。男性が続けるとばかりにじっと見つめてくる。

この人には誠実でいたいと、不意にそう強く思った。正直に話すことで、香純の謝罪の気持ちは本物だと示したい。

香純はもう一度バッグを開けて別の名刺を取り出し、男性に差し出した。

「藤波香純。……司書？」

「はい。図書館司書として働いています」

「堅実な職に就いているのに、何故代役なんてことをしている？ 副業は禁止じゃないのか？ バ

レたらどうなるか、知らないわけじゃないだろう」

男性の言葉に香純は目線を落とすが、すぐに何度も小さく頷いた。

「お金が必要だったんです。夜の特別な仕事も考えましたが、リスクが高過ぎました。それに比べて代役派遣サービスだと依頼人と一対一で向き合える。たとえ知り合いに見られたとしても、友達と言えばバレません。また、依頼人もお金を払って代役を立てていると知られたくない人がほとんどなので、わたしにとってこれ以上のバイトはありませんでした」

「どうしてお金が必要なんだ？ ブランド品を買い漁った？ 自分磨きに注ぎ込んだ？ ホスト通いに明け暮れた？」

その辛辣な物言いに、香純は思わず笑いそうになる。自分の私生活からかけ離れた内容過ぎて、おかしかつたためだ。

だが、それを堪えて、男性を真つすぐに見つめた。

「自分のために使ったお金ならどんなに良かったか。わたしには、結婚を考えていた彼氏がいたんです。彼は料理人で、独立する計画を立ててました。でも資金が足りず、わたしが連帯保証人になりました。でも彼が姿を消してしまい、わたしが借金を背負う羽目に……。安っぽいドラマみたいですよ」

重たい話で男性の気分を害さないために、香純はなんでもないことだと肩をすくめる。

しかし男性はだまされず、香純の心を覗き込むような眼差しを向けてきた。

「自己破産は考えなかったのか？」

香純は目を見開き、とんでもないと頭を振った。確かに、自己破産申請を行えば借金はなくなる。

でも、そういう逃げ方は香純の理念に反する。連帯保証人になると決めたのは香純自身だ。いくら辛くても、苦しくても、自らの責任を放棄するつもりはない。

「全てをなかつたことにはできません。これもわたしの人生です」

「今も、まだ……その彼氏を想ってるから？」

「それはいいです。もちろん、最初は裏切られたせいで立ち直れないと思うほどの痛みを受けました。でも、もう二年経ち、彼への気持ちは綺麗になくなりました。今は借金を完済することだけを考えて、日夜働いてます。これも、人生の勉強 だと思って」

「なるほどね」

男性は二枚の香純の名刺を交互に見つめていたが、不意に何かを思いついたのか軽く頬を緩め、ビールを一気に飲み干した。空になったグラスをテーブルに置き、香純に目を向ける。

「君……、藤波さんに頼みがある」

香純は彼と目を合わせ、小さく頷いた。迷惑をかけた償いとして、なんでもする覚悟があった。すると、男性が膝に肘をついて、心持ち前屈みになる。

「俺の婚約者を演じてくれないか」

「はい」

あまりに強く決心していたせいで反射的に頷いてしまったが、すぐに何かがおかしいと気付く。

そして男性の言葉を何度も反芻するうち、ようやく彼の言ったことが頭の奥に届いた。

婚約者？ えっ？ ……何!?

香純は狼狽して顔を上げた。男性は真面目な顔つきをしており、そこにからかいの要素は一切浮かんではない。

「もちろん偽りの婚約者だ。但し、誰にもそうとバレない付き合いをしよう。まるで本物の恋人同士のように……」

「な、何を言って——」

呆然とし、頭を振る。

だがそれを見越していたのか、男性が余裕たつぶりの態度で口角を上げた。

「そんなに驚くことかな？ 君は今までも、依頼に応じて恋人を演じてきたんだろう？ それと、やることはほとんど変わらないと思うけど。違うとは言わせないよ。俺はこの身で体験したんだからね。君は俺にしな垂れかかり、キスをした」

男性の視線が意味ありげに香純の唇に落ちる。しばらくそこを見つめられ、香純の意思に反して下腹部の深奥に熱が生まれた。

自分の反応に戸惑いつつも、それを必死に押し隠して男性を見返す。

確かに、依頼に応じてこれまでに何回も恋人を演じてきた。でも、唇を許したことは一度もない。男性にもそう伝えたいと思うのに、彼の意味深な目つきに、喉の奥が締まって声が出ない。

「俺が頼んでいるのはそれと同じ。さらに、俺が好きで堪らないという風に演じてくれたら、尚更

いいな」

何故そんなことを頼むのだろう。偽りの婚約者など仕立てなくても、先ほどの恋人と仲直りすればいいのでは？

香純は腹部に力を込め、ほんの僅かだけ上体を倒して男性との距離を縮めた。

「どうして偽りの婚約者が必要なんですか？ 貴方には恋人がいるのに……。もしかして、許してもらえないかとも思つて？ 大丈夫、わたしの見た限り、彼女は貴方をとても愛しています。わたしがきちんと説明すれば、きっと誤解は解けます」

「そうする必要はない。彼女はとても……。気が強くてね。藤波さんも見ただろう？」

そう言われて、詩織が凄じい剣幕で香純を叩こうとした姿が脳裏に浮かんだ。

でもあれば、予想もしなかった恋敵の登場に感情を昂らせただけだ。

「彼女は――」

香純は言い返そうとするが、男性の鋭い眼光に何も言えなくなり、開きかけた口を閉じた。

「彼女との縁は切れた。お互いの性格上、もう二度と結べない。俺たちは終わったんだ」

「諦めないでください。貴方はまだ何も行動を起こしていません。やれるだけのことはしましょう。わたしも精一杯――」

「無駄だ。彼女のことは、もう忘れる」

ああ、自分のせいでカプルの仲を壊してしまふなんて！

瞼の裏が熱くなり、チクチクと刺す痛みが走る。視界が霞んでいくのがわかって、慌てて感情を

押し止めようとした。でも、切った堰は元に戻らない。

「ごめんなさい……。本当にごめんなさい」

香純は涙を零さないように必死に堪えて、何度も謝った。

「そう思うなら、俺と取引してくれるね？ 期間は七月末までの三ヶ月ちよつと。その間だけ俺の偽りの婚約者になってくれるのなら、全てを許すよ。もちろん、謝礼も出す。君の借金を全額肩代わりしよう」

「えっ？ 借金を？ な、何を言ってるんですか!？」

「いくらだ?」

おろおろする香純を追い詰めるように、男性が重ねてくる。彼の一步も退かない姿勢を打ち崩すには、香純が金額を言うしかないのだろうか。

個人的な話はしたくないという気持ちが強いものの、金額を聞けばその多さに、あっさり恋人とやり直す方向へ考えを改めるかもしれない。

香純は、中高年サラリーマンの平均年収をはるかに超える金額を口にした。それで怖じ気づくかと思つたのに、予想に反して男性は笑い、問題ないとはかりに手で一蹴する仕草をした。

「利子も含めて俺が出そう。その代わり、二つほど条件をつけさせてもらう。まず一つ目、副業は辞めてもらいたい。俺が借金を返済すればバイトは不要だろ？ 二つ目、偽りの婚約者になる約三ヶ月の間は、俺と同棲してほしい」

「ど、同棲!?!」

「詩織さん……先ほどの女性と一緒になれない理由を説明するには、彼女の他に愛する女性がいる、その人と婚約したと、親族たちを欺く必要もある。普段の生活から本物の恋人っぽく振る舞わないと、嘘がバレてしまうだろう。絶対に、偽の婚約者だと見破られるわけにはいかない。それほどだます相手は、大変な人なんだ」

男性は立ち上がり、香純が座るソファの肘置きに腰を下ろした。

「取引に応じてくれるね？ ……香純」

香純は濡れた目で男性を見上げる。

自分の間違いで彼らの仲を裂いた以上、なんらかの責任を取るつもりでいた。

でもまさか、この人の偽りの婚約者を演じるように求められるとは……

こんな風になるのを望んでいたわけではない。香純は、きちんとカップルの仲を修復したかっただけだ。

しかし男性は、自分を信用しなかった詩織を許せないのだろう。

そしてそうさせてしまった原因は、わたしにある——そう思っただけで、情けなさと申し訳なさが相まって、再び涙腺が緩んでいく。

何故偽りの婚約者が必要なのか、男性の親族たちをだまさなければならないのか、期間が七月末までなのか——。その理由はわからない。

しかし、香純にそれを知る資格はない。偽りの婚約者になることで男性の面目が立ち、カップルの仲を壊した責任が取れるのなら、香純は一生懸命取り組むだけだ。

「わかりました、条件を吞みます。わたしが迷惑をおかけした以上、できることはなんでもします」

「よく言った！」

初めて上機嫌に目を輝かせた男性が、香純に手を伸ばしてきた。思わずビクツとなる香純の頬に触れ、優しい手つきで撫でる。

「俺の恋人として過ごす間、決して辛い思いはさせない。約三ヶ月後には、楽しかった、いい思い出ができたと思つて帰れるようにする」

「よろしくお願いします」

男性が小さく頷き、もう一度思いやるように香純の頬に触れ、手を離した。彼は脱ぎ捨てたスーツから小さなケースを取ると、名刺を香純に差し出す。

「俺は、壬生秀明だ。年齢は三十二歳、今年三十三歳になる。香純は？」

「わたしは二十五歳になったばかりです」

「七歳……八歳差か。うん、いい感じだ」

壬生が呟く中、香純は手元の名刺をまじまじ見つめる。

「壬生さん、不動産会社で働いていらっしやるんですね」

そう言うと、壬生が名刺を手で覆った。

「あとで確認できるだろう？ まず先に、今後の話をしないと。俺の家に来るのは来週……いや、再来週末でいいかな？」

「はい」

素直に返事する香純に、壬生が満足そうに口元をほころばせた。

その後、脱ぎ捨てた上着を取って羽織ると、壬生は香純の手を取って部屋のドアへと誘う。

「では、再来週に一度連絡を入れるよ。俺からの電話を待っていてほしい」

「わかりました。ところで、あの、壬生さん——」

これからどこへ行くのか訊ねたかったが、言い切る前に彼の指が香純の唇に触れた。

思いがけない行為に、言葉を呑み込む。

「いいかい？ 俺のことは壬生ではなく、秀明と呼ぶように。名字呼びは初々しくていいけど、婚約者なら名前で呼ぶべきだ。それと、その客人を相手にするような丁寧な話し方も禁止だ。俺の言っている意味がわかるね？」

二人の視線が急速に絡み合い、逸らせなくなる。

今日初めて会ったばかりの人と同棲し、偽りの婚約者を演じるなんて、普通ではありえない。不安に駆られるのが当然なのに、壬生の優しい眼差しに、その心配がどこかへ消えていく。

代わって、普段の生活から本物の恋人つばく接するかと思うと、不安とは別の何かが胸の奥で騒ぎ始めた。

この気持ちは、いったい……？

「香純、返事は？」

香純の唇に触れていた手が離れた。香純は小さく頷いて、肯定の意思を表す。

「仰るようになります」

「だから——」

まだ距離のある話し方に納得しないのか、壬生の顔に苛立ちが見え隠れし始めた。

香純は反射的に違うと顔の前で手を振る。そして、自ら彼の方へ手を伸ばした。壬生のスーツの袖を掴んで距離を縮め、逃げるつもりはないと態度で示す。

「今日だけは許してください。わたしたちの出会い方はちょっと普通ではないので、まだ気持ちが追いついてなくて……。でも自分の罪は理解しています。だから、あと少しだけ待ってください」

「あと少し？」

壬生は訝しげに問う目を向けつつも、彼の袖を掴む香純の手に自分の手を重ねた。

「はい。壬生さんの家へお邪魔する日までに、気持ちを整理しておきます。期限付きの婚約者として求めに応じられるように努めますので、今日はこれで勘弁してください」

香純の言葉に小さく頷く壬生の目には、優しい光が宿っていた。

「わかった。では君がどうい風演じてくれるのか楽しみに待つとする」

「ハードルを上げないでください」

間髪容れずに返事すると、壬生は肩を揺らして笑った。しばらく楽しそうな声を上げていたが、次第に落ち着きを取り戻すと、香純を部屋の外へと促す。

「今日はもう香純を解放しよう。下まで送るよ」

壬生が機嫌よく香純の手を取って、エレベーターホールに向かう。

それは外に出ても変わらなかつた。そろそろ解放してほしいと思いつつ、これも壬生の婚約者を努めるためのプロセスだとわかっている。

香純は落ち着くよう自分に言い聞かせて、壬生と一緒に歩いた。

「帰りは電車？ もしタクシーに——」

そう訊ねてきた壬生が、言葉を切った。

不思議に思い壬生を窺うと、彼はあらゆる方向に目を向けている。その顔からは、先ほどまでの陽気な色が消えていた。

「壬生さん？ わたしは電車で帰るので、ここで失礼します。何かあれば、連絡してください」

しかし壬生は、香純の言葉を無視して、いきなり肩に腕を回してきた。

「俺が電車で帰らせるとでも？」

「はい？」

戸惑う香純を、壬生がタクシー乗り場へ急ぎ立てる。そして香純は、無理矢理車内に押し込まれた。

「えっ？ あの？」

目をぼちくりさせる香純に、壬生は硬い表情を解いた。ポケットから財布を取り出してお札を一枚抜くと、それを香純の手に握らせて、顔を寄せる。

「偽りの婚約者として演技をしてみらうのは、同棲を始める日からと決めていたが、予定変更だ。

前倒しさせてほしい」

「前倒し？ ……えっ？」

香純は、壬生の大きな手で頬を包み込まれた。その触れ方に、心臓が早鐘を打ち始める。

「俺を愛しげに見つめて。大好きな男と離れたくないという想いを……」

壬生のかすれ声に、二人を包み込む空気が濃厚なものに変わる。

見つめられるだけで何かが大きく渦を巻き、胃の中に火が点いたような錯覚に陥った。

自分の反応に戸惑うものの、目の前の壬生から目を逸らせない。

呼吸がし辛くなつて唇をかすかに開けると、壬生の目線がついとそこに落ちた。湿り気を帯びた息に唇をなぶられて、香純は初めて彼が距離を縮めてきたと気付いた。

「そのまま……」

お互いの吐息が間近でまじり合ったその時、顔を軽く傾けた壬生に唇を塞がれた。

突然のキスに目を見張り、香純はシートの上で軀を強張らせ、手の中の札をきつく握り締めた。

壬生が香純の緊張を解くように、柔らかい唇を何度もついでにばむ。

「ん……う」

壬生の意図を掴めなかつたが、香純はなすがままに行為を受け入れた。

微動だにせず耐える香純をなだめるように、壬生は最後にべろりと舌で唇を舐めると、顔を離れた。

「ありがとう、香純」

香純の頬を撫で、上半身を起こす壬生。

「気を付けて帰るんだよ。再来週、連絡する」

そう言った壬生は、運転手に「出してくれ」と声をかけた。彼が一步下がるとドアが閉まり、タクシーが発進する。

「どちらまで行かれますか？」

「あ、あの——」

香純は、ここから二駅ほど先にある駅名を告げた。

タクシー代をもらったとはいえ、そのお金を使うわけにはいかない。それなら最寄り駅を言えればいいことかもしれないが、ホテルから駅までは目と鼻の先。今度は運転手に対して気が咎めてしまふ。

もう、どうしてタクシーに乗せたの？

香純は壬生とのやり取りを思い出しながら、じんじんする唇にそつと触れた。そして、後ろ髪を引かれる思いで振り返る。

「えっ？」

壬生はもういないと思ったのに、今もまだ、エントランスに立っていた。

だが、一人ではない。壬生の目の前には年配の男性がおり、その人に頭を下げている。

「あの人は……いったい？」

もつとよく見たかったが、タクシーが公道に出てしまったため、壬生の姿は視界から消えた。いろいろ考えたところで、何かがわかるはずもない。

香純はため息を吐き、手の中のしわくちゃのお札に視線を落とす。

「……あっ！」

唐突に、香純は代役の仕事に失敗した件を思い出した。

早く連絡しなければ！

運転手に携帯を使う旨を伝えて、代役派遣サービス会社に電話をかける。

「岩倉です。今夜、青井のピンチヒッターで仕事に向かったんですが——」

香純は葵が仕事で使用している名前を出し、素直に自分がミスを犯したと話した。

依頼人とは接触していないが、香純が間違った人に声をかけてしまったことは、先方も知っていると伝える。明日、詳細を話すために会社に顔を出す、まずは依頼人への対応をお願いしたいと伝えて、通話を切った。

「あっ、そうだった。辞める件も言わないと……」

香純は小さく呟くと、脱力してシートに凭れた。

これからの三ヶ月間、どんなことが待ち受けているのか見当もつかない。それでも壬生のために誠意を尽くすのが、香純にできる精一杯の償いになる。

必ず壬生を助ける行動を取ろうと誓いながら、香純は目を閉じた。

壬生秀明とシティホテルで別れて以降、香純は図書館司書の仕事を終えると連日代役派遣サービ
ス会社に足を運んでいた。

会社の担当者と共に、ホテルで大迷惑をかけた依頼人への対応をするためだ。

依頼人が連れてきた女性が香純に気付かなかったため実害はなかったとも言えるが、その間のや
り取りは大変だった。だが当日にかかった料金や次回の代役などを会社がもろもろ補償することで、
この話はようやく落ち着いた。

契約上、香純が弁償する必要はないが、その代わりにどんどん仕事を入れて損害を埋める働きを
するのが筋というもの。しかし秀明と交わした約束があるため、これ以上このバイトはできない。

香純は申し訳なく思いながらも辞める旨を話し、会社をあとにした。

そして翌日からは、秀明の家に行く準備に追われる。

一日、また一日と経つにつれて、香純は秀明の偽りの婚約者になる覚悟ができていった。また、
考える時間を持てたお陰で、普段と変わらない自分で付き合うのが一番いいという答えも出ていた。
何しろ、一緒にいる期間が長い。本来の自分とは違うタイプの女性を演じていたら、絶対にどこ
かでミスをしてしまうだろう。

秀明の親族たちを欺かなくてはならないのだから、リスクは減らすべきだ。

「ただ、秀明さんを愛してるって演技がね……」

ほんの一時間ぐらいならそれも可能だが、四六時中は難しい。いつどんな時にその演技が必要に
なるかわからない以上、そこが心に引っ掛かって仕方がなかった。

「どうしたの、ため息なんか吐いて。何か問題でも？」

ロッカーからバッグを取り出した香純に、織田が話しかけてきた。

「あ……あの、ゴールデンウィークの代休について考えていたんです。まだ提出していません」

「まだ出してないの!？」

香純はロッカーを閉じると、織田と一緒に更衣室を出て職員専用通路口へ向かう。

「特に予定もないので後回しにしていたんですけど、高橋次席にまだかと催促されて。早く出さ
ないと、まとまった休みが取れないぞ」と言われてしまいました」

「大丈夫よ。次席がお尻を叩くのは、司書たちの希望日に休みを取らせてあげたいっていう一心か
らであって、別に怒ってるわけではないし」

「次席の手を煩わせないよう、なるべく早く早く提出するようにします」

織田が施錠し、最終チェックを終えるのを待つ。

不意に、生暖かい風がふわっと香純の頬を撫でる。

天気予報では、今週は気温が上がって上着は不要と言っていた。まさに、そのとおりだ。

「これでよし! さあ、帰りま……うん? ねえ、あそこに人がいない? もしかして、不審者?」

「えっ、不審者!」

織田の視線の先を確かめるように、香純は恐る恐る目を向けた。

図書館の敷地を出たところにあるガードレールに、男性が腰を下ろしている。膝に肘を乗せて前屈みになっているので顔ははっきりしないが、雰囲気からくたびれた感じには見えない。

「藤波さん、駅まで送っていくわ。何かあったら大変だし」

「いいんですか？ 車だと遠回りになるのに……」

「気にしないで。遠回りと言っても、ほんの数分だしね」

織田は香純の腕を取り、駐車場の方へ引つ張る。香純は彼女に頭を下げた。

「すみません、ありがとうございます——」

そう言っ、ちらつと男性の方に目を向けた時、その人が不意に顔を上げた。

焦って目を逸らすが、一瞬視界に残った見覚えのある男性の顔に、香純の足がぴたりと止まる。

えっ？ ……壬生秀明さん!?

「藤波さん？ どうしたの?」

「あ、あの!」

織田を見て、再び秀明に目を向ける。ガードレールに座っていた彼が立ち上がり、手を上げた。

「織田さん、あの男性、わたしの知り合いです」

「知り合いです?」

織田がさつと振り返ると、それに気付いた秀明が礼儀正しく会釈した。

「な、何!? めちゃくちゃカッコいいんですけど!」

「えっと……確かにそうですね。あつ、すみません。送ってくださいという話でしたけど、わたしここで失礼します」

「わかった。でも彼のこと、また聞かせてよね。じゃ、お疲れさま!」

駐車場へ行く織田を見送ったあと、香純は急いで携帯を取り出した。

秀明からの連絡に気付かなかったのかと思っ、やはりメールも着信もない。

連絡もせず職場へ来たという事は、何か問題が起ったのだろうか。

香純は身を翻すと、階段を駆け下りて、レンガ造りの遊歩道を走った。足を滑らせないように気を付けながら図書館の敷地を出て、秀明の前で立ち止まる。

「秀明さん、どうしてここに?」

「驚いた?」

楽しそうに笑う秀明の声を耳にするや否や、香純の心臓がドキンと高く打った。

自分でもよくわからない感情に、手の中にある携帯を強く握り締める。

「最初は、俺の家に来る日の予定を連絡するだけだと思ってた。だが、考えを改めたんだ。

これから一緒に暮らすのに、君への配慮が足りなかったかなど。悪かったよ」

秀明は自嘲するように口角を上げ、香純に近づき手を取った。さらにその手を、彼の肘へ持つていく。そうして二人で腕を組むようにされた。

秀明の行動に息を呑む香純を尻目に、彼は最寄り駅の方へと歩き出す。

香純は秀明と歩幅を合わせながら、おずおすと彼を仰いだ。

「考えを改めたって、どういう意味？」

「せっかく一緒に暮らすんだ。楽しまないと損だと思わないか？ 俺たちが親しくなればなるほど、それが香純の演技に色を添える。カラフルに彩色されていけば、親族たちは俺たちが互いに想い合ってると思うに違いないからね。それで、今夜はお互いをもっと知るためにデートしないかか誘いにきたんだ」

「で、デート!？」

香純は素っ頓狂な声を上げる。

それがおかしかつたのか、秀明が頬を緩めたまま香純に流し目を送ってきた。

「そう、デートだ。香純には俺を知ってもらいたいし、俺も君を知りたいと思ってる。デートしながらだと、お互いが見えてくるんじゃないかな？ そうなれば、香純も婚約者を演じやすくなると思う。どう？」

そう言いつつも、秀明は香純の返事がもうイエスだと思っているようだ。

秀明の言うとおり、同棲を始める前に彼と過ごすのはいいことかもしれない。彼について予備知識を得られるし、きつと婚約者を演じる上でいろいろと助けになる。

「どこに連れて行ってくれるの？」

秀明に心持ち軀を寄せて窺うと、彼は楽しそうに唇の端を上げた。

「そう言ってくれると思ってたよ。まず、夕食を取ろう。店を予約してるんだ。初めてのデートで

連れて行くのはどうかと思うが、俺たちは一気に壁を越えて、愛し合う婚約者同士の域にまで達しなればならない。だから、許してほしい」

「気にしないで。だって、わたしは秀明さんの本当の恋人ではないもの。誰が見ても婚約者だとかるように、貴方と親しくなるのが務めだと理解してます」

「本当に前向きな性格なんだね」

「いつもそうとは限らないけれど。ただ…受け入れなければならないものに抗しても仕方ないという気持ちがあつて。当然最初は悔やんだり、泣いたりするけど、ずっと後ろ向きではいられない。前を向いて歩かないと、何も進まないもの。そうやって動けば、悩みが解消された時はきつといいことが待ち受ける。…そう思いたいです」

「では、俺たちが一緒に過ごした三ヶ月後には、いったいどんな物語が待ち受けているか、楽しみにしておこう」

「ええ」

素直に返事をする香純に、秀明が笑みを零す。

まるで妹を可愛がるような柔らかい表情を浮かべた。秀明の態度に戸惑いつつも、香純はそれ以上何も言わなかった。

電車を乗り継いで向かった先は、中目黒にある焼き肉店だった。

店内は温かみのある木造りの内装で、どの席もスーツ姿のサラリーマンやOLたちで埋まり、と

でも賑わっている。

「こんばんは」

「いらつしやいませ！ お待ちしておりました。さあ、こちらへどうぞ」

秀明は名前を言っていないのに、店員は彼の顔を見ただけで四人掛けの予約席へと案内する。
「まず、生でよろしいですか？」

店員がお冷やおしぼりをテーブルに置いて、秀明に訊ねる。

「香純もビールでいい？ 飲める？」

「ええ、大丈夫」

「では、すぐにお持ちしますね」

お通しのもやしやほうれん草、ぜんまいや人参のナムルを並べ終えると、店員は奥へ消えた。

二人きりになるなり、秀明が香純に問うように片眉を上げる。

「残念だった？ 初デートで焼き肉屋に連れて来られて」

香純は秀明の言い方に口元をほころばせながらおしぼりを彼に渡し、自分も手を拭った。

「驚きはしたけど、残念とは思ってない。だって、ここは秀明さんのお気に入りのお店でしょ？
そこに連れてきてもらえるなんて、とても嬉しい」

「どうして俺のお気に入りだと？」

「秀明さんは名前を伝えていないのに予約席に通された。つまり、お店の常連で顔見知りということ。正解ですよ？」

そう言った時、店員が来てビールのグラスをテーブルに置いた。違う店員が、お肉ののった皿を運んでくる。

「こちら、食べ比べができる黒毛和牛の特選盛り合わせです」

白いプレートに盛られた上ロース、リブロース、上カルビ、タンなどの色はとても鮮やかで、まるで花が咲いたように綺麗だった。

店員がいなくなると、秀明がグラスを手を取った。香純も慌てて自分のグラスを持つ。

「今夜はお互いをよく知るためにここへ連れて来たが、これでは俺の心の中を余すところなく覗かれそう。でもどんだんそうしてほしい。親族たちをだますには、俺の細かい部分を知る必要があるしね。ではこれからの約三ヶ月……七月末までよろしく頼む。何も問題が起きず、香純が笑顔で自分の生活に戻れることを願って、乾杯」

「乾杯」

冷えたビールを一口、二口飲んだあと、秀明がトングを使ってタンを網の上に置く。

これまでの秀明の言動から、香純は彼が自ら率先して行動する人だと思った。

この人は起業家タイプかも——なんて考えながら、タンにレモンをかけて食べた。

「んんっ！ ……美味しい！」

「喜んでもらえたようで良かった。仕事柄、いろいろな店で食べるけど、やっぱりこの店に戻ってしまふんだ。いつ食べに来ても、俺の期待を裏切らない」

次に脂がのったカルビや上ロースを焼き始めるが、秀明はそうする間もいろいろな話をしては香

純を楽しませてくれた。

にこやかに答えるうちに、徐々に香純の硬さがなくなっていく。

まるで仲のいい先輩と後輩、もしくは隣の家に住む、年の離れた幼馴染おさなじみといった風だ。それほど香純は、秀明に対して心を許していた。

「この店は、よくデートで使うの？」

「デート？ いや、女性を連れて来たことは一度もない。……そう、香純が初めてだ」

そう言いながら、秀明はまるで雷にでも打たれたような顔をした。それから徐々に力を抜き、香純にからかいの滲こぼんだ目を向ける。

「そもそも俺の知る女性は、こういう場所に来たがらないからね。彼女たちが望むのは、イタリアン、フレンチ、そして多国籍料理。そこに綺麗な夜景がプラスされれば、なお上機嫌になる」

秀明の言う女性とは、彼のこれまでの恋人たちに違いない。

香純と元カノとの待遇の違いは当然のこと。彼女たちは秀明に愛された女性で、香純は彼に迷惑をかけた最悪な人物。その違いは明白だ。

気にする方がおかしいのに、何故か気落ちしてしまう。

そんな自分に戸惑いを覚えずにいられなかった。

「どうした？ 何か気掛かりでも？」

美味おいしそうに焼けた肉を香純の皿に置きながら声をかけられて、ハツとする。

「眉間まゆげんに皺しわが寄よってる」

「えっ？ あっ……別に、何も……」

「香純？」

秀明の口調が探るものに変わる。

香純はすぐに表情を改めて、なんでもないと顔の前で手を振った。

「気にしないで。……大丈夫。えっと、そう！ いつから恋人っぽく親しみを込めた話し方に変えようかなと思っただけ。秀明さんのことは、既に名前と呼ばせてもらってるけど」

「もうかなり変わってる。気付いていないのか？ 明らかに声が柔らかくなっている。俺の名前を呼ぶ時も、話しかける時も」

柔らかくなってる？ いつもと変わらないつもりなのに、そう感じると!?

「失礼します」

女性店員の声でした。

「ホルモンの盛り合わせプレートと、生ハラミのお寿司です」

「ありがとうございます」

店員に頷くと、秀明がホルモンに手を伸ばした。

「このホルモンも美味おいしいんだ。生ハラミのお寿司も。この店では、必ず注文してる。香純にも是非食べてほしい」

「ありがとう」

新しく運ばれてきたメニューのお陰で、香純は先ほどの秀明の言葉を深く考えずにすんだ。彼に

勧められるまま、寿司を口に放り込む。生ハラミの柔らかさと甘みが、酢飯とよく合っている。口くち腔くわうに広がるワサビとの相性も絶妙だ。

「美味しい！」

「だろう？」

香純の感嘆の声に、秀明も目を細める。

まるで本物の恋人同士のように微笑み合って、香純はようやく気付いた。

こんな風に、率直に笑い合う関係で進めていけばいいということ。

そうすればこれからの約三ヶ月、偽りの婚約者として一緒に暮らしても上手くいくに違いない。

今みたいな関係を目指せばいいのよね？ —— そう思いながらも、秀明が先ほど元カノの話をした時に感じたざわざわとしたものが、静かに心の奥底へ沈んでいく。その妙な感覚に、自分でも戸惑っていた。

なるべく気にしないように努めながら焼き肉を食べ終え、デザートのアイスクリューを口に入れる。その時、秀明が彼の家へ移る話をし始めた。

「土曜日は仕事なんだよな？」

「ええ。ゴールデンウィークに開かれる『ふれあい祭り』の準備で忙しくて」

「じゃ、一日早いけど……明後日の金曜日に移ってくる？ 早めに移って俺の家に慣れておけば、図書館の定休日にはゆっくりできると思う」

異論はないと秀明に頷く。

「香純、かなり肝が据わってきたね」

「ううん、そうじゃない。わたしは、秀明さんの望むことにはなんでも応えるつもりなの。早めに移れと言われれば、それに従うだけ。貴方のために」

「香純……」

真顔で見つめてくる秀明に、香純はにっこりした。

「気にしないで。悪いのはわたしだし。……ところでゴールデンウィークの話なんだけど、その期間は仕事なの。代わりにあとで代休を取れるんだけど、まだその申請を出していなくて。秀明さんの都合に合わせて取るつもりだから、予定があったら遠慮せず言ってね」

そう言った途端、秀明が手を伸ばして、香純の手を握った。

突然のことにびつくりして秀明を見返すが、彼は何も言わずにただ香純の手の甲を撫でる。そんな彼の仕草に、香純は息が止まりそうになった。

店内は賑わっているのに、香純の周りからは喧騒けんそうが遠ざかっていく。代わりに妙に空気が張り詰めて、軀からだを雁字搦かりがめにした。

息をするのも辛くなった時、ようやく秀明が手の力を緩めた。

その隙を逃さずに手を引き抜くと、秀明がどこか責めるような声を零した。

「俺の望みがなんであるうとも応えると言ったのは、嘘？ 俺が触れただけでこんなにも緊張されたら、俺の婚約者だと親族たちに紹介できない」

「び、ごめんなさい！ だっていきなりだった……ううん、そうじゃない。わたしのせいね」

香純は肩を落とした。偽りの婚約者を演じ始めたら、秀明に手を触れられたり、肩を抱かれたりすることもあるのかっていたはずなのに……

「そろそろ出ようか。実は、まだ寄りたいたいところがあるんだ」

「……はい。秀明さんと一緒に行きます」

もう戸惑わない。わたしは秀明さんが望む婚約者になります——そう決意を新たにした香純は、秀明と一緒に焼き肉店を出た。

「ごちそうさまでした」

夕食のお礼を言う香純の手を取り、秀明は自分の肘に持つていく。香純が隣に寄り添うと、彼は晴れやかな顔で歩き出した。

電車に乗って降りた先は、銀座だった。けれど秀明は、このあとどこへ行くのか口にしない。

香純は秀明が行きたいという場所に従うだけだからと最初は特に訊ねなかったが、歩を進めるにつれだんだんそわそわしてきた。

堪らず秀明の腕を掴む手に力を込めて、自分の方へ引き寄せる。

「うん？ どうした？」

「ねえ、どこに行くの？」

秀明が口にしたのは、香純でも知っている有名ブランドのジュエリー店だった。

図書館にある雑誌にも、よく載っている。そのジュエリーはとても高価で、女性が贈りたい工

ンゲージリングを扱う店としても知られている。

どうしてそんなお店に？

「詩織さんを覚えてる？」

不意に秀明に問われて、胸の奥がざわついた。それが渦を巻き、香純は自分の軀がどこか深い場所へ落ちていく感覚に囚われる。

「……ええ」

「知つてのとおり、俺たちの仲はもうどうにもならない。だが、詩織さんには公の場で恥をかかせてしまった。それで、お詫びの品を贈ろうと思ってる。香純も一緒に選んでほしい」

「別れた恋人に、アクセサリーを？」

その考えはおかしいと言いたくなかったが、香純は言葉をぐっと呑み込んだ。

二人の関係は、秀明たちにしかわからないこと。香純に、何かを言える権利などない。

「ああ、せめて償いの気持ちを示さないとね。……いけないか？」

「いいえ。わたしで役に立つなら選ぶのを手伝うけど、最終的には秀明さんが決めてね」

「そうすると誓うよ」

秀明がそう言った時、ちょうど店の前に到着した。

「いらっしやいませ」

「いろいろ見せてもらっつよ」

「どうぞゆっくりご覧くだささ」